

研究課題 (テーマ)		下部尿路症状と排尿前後の膀胱内尿量からみた妊娠期における排尿機能の特徴	
研究者	所属学科等	職	氏名
代表者	看護学科	助教	北島 友香
分担者	看護学科	助教	西村 香織
	看護学科	助教	三加 るり子
	看護学科	助教	岡田 麻代
	看護学科	教授	松井 弘美
研究結果の概要			
<p>妊娠や分娩によって、女性は尿失禁をはじめとする下部尿路症状を引き起こしやすくなる。産後の尿失禁には妊娠中の尿失禁が関連しているとされ、妊娠中の排尿機能を知ることは、産後の下部尿路症状のリスク予測に重要であると考えられる。しかし、妊娠中の下部尿路症状の実態を調査した報告は少なく、妊婦の自覚症状だけでなく客観的な指標を含めて排尿機能を調査した研究は見当たらない。そこで、本研究では、妊婦の下部尿路症状の自覚と膀胱内尿量を調査し、妊娠期における排尿機能の実態を明らかにすることとした。</p> <p>経膈分娩予定の妊娠後期の妊婦 25 名を対象に、妊婦が自覚する下部尿路症状（尿失禁、尿意切迫感、残尿感、等）と排尿後の膀胱内尿量（以下、残尿量）を調査した。残尿量は、携帯型超音波診断装置を用いて計測した。また、残尿量測定時の残尿感の有無を聞き取り調査した。</p> <p>大多数の妊婦が妊娠後に何らかの下部尿路症状を自覚しており、自覚する症状は、尿失禁、尿意切迫感、残尿感の順に多かった。残尿については、一部の妊婦に正常値を超える残尿量が確認され、妊娠経過に伴い残尿が生じやすくなる可能性があると考えられた。</p> <p>残尿の有無と下部尿路症状の有無の関連を分析したところ、残尿の有無と残尿感の有無には関連が見られなかった。また、残尿量測定時に残尿感があると答えた妊婦の中には、実際に残尿がある妊婦とそうでない妊婦の両方が含まれており、残尿があっても残尿感を訴えなかった妊婦もいた。残尿の有無にかかわらず、ほとんどの妊婦が妊娠によって生理的に頻尿となっており、児の成長に伴い児頭による膀胱への圧迫感も生じている。そのため、それらの正常な妊娠経過において観察される症状から残尿の有無を認識することは難しい。一方で、残尿がある妊婦は尿意切迫感を自覚している割合が有意に高かった。残尿があることで尿の貯留によって膀胱容積が大きくなりやすく、さらに妊娠に伴う頻尿が重なることで尿意切迫感を感じやすいと考えられる。残尿感だけでなくその他の自覚症状も合わせて妊婦の排尿状況をとらえることが必要である。</p>			
今後の展開			
<p>今回調査対象とした妊婦の分娩後の排尿状況を分析し、妊娠中の排尿状況がどのように分娩後の排尿状況に影響しうるのかを検討していくことで、妊娠中から産後の排尿アセスメントの視点について示唆を得る。</p>			